

外国人力士の日本語習得：言語管理と自然習得

宮崎里司

キーワード

外国人力士 言語管理 自然習得 学習ストラテジー リソース

1 はじめに

本稿は、外国人力士の日本語習得を言語管理と自然習得の観点から考察した研究である。言語管理の問題は、学習者の習得プロセスへの関心に繋がるだけでなく、自然習得への深い理解にもかかわる。また、言語管理は、効果的な自然習得を成し遂げるためのキーワードにもなる。この研究では、言語管理と日本語教育の接点を具体的に検証するため、教師管理外の習得環境で、自然習得を行っていると思われる外国人力士の習得方法を、彼らのインターアクション行動から、学習ストラテジーと学習リソースに焦点を当てて考察している。さらに、一般の外国人日本語学習者にどのように応用できるのかについても、自律学習の観点から、その可能性を探った。

2 言語管理と自然習得

学習者の習得過程は、誰によって、どのように管理されているのであろうか。現在では、言語習得は、言語管理 (Jernudd and Neustupny 1987) の一形態として捉えるのが一般的になり、言語教育や言語学習の分野で、言語管理に対する関心が高まってきた。それと同様に、接触場面では、学習者の語学習得に働きかける管理役 (マネージャー) のバリエーションが認識されるようになってきたが、一方では、学習者を含む、多くの言語教育の関係者にとって、語学学習のプロセスで管理する主役は、依然として教師であるという意識が強い。こうした意識は、教師主導型の授業計画に従わないと、効果的な学習が行

われないという考えを支持するグループに強い。確かに、教師の存在は無視できない。ほとんどの外国語学習は、教師管理による学習環境から始まるからである。しかし、基本的には、教師管理、学習者管理、そして、管理者不在といった、三つの基本管理タイプが存在する（ネウストプニー 1999）。教師管理とは、教師がさまざまな学習管理行動に関わるタイプであるが、具体的には、教室場面での教師によるインストラクションや教材を使った説明などがある。一方、学習者自身が、管理責任者になる場合もある。会話表現を学ぶために、メールを通じて、チャットする仲間を探す学習者は、自らの学習を管理しているといえるだろう。その他には、管理者が存在しない言語管理プロセスも存在することを忘れてはならない。これが、自動習得、または自然習得と呼ばれるプロセスである。自然習得は、学習者や教師の働きかけがなく、いわば学習者が、無意識の状態ですべてが行われるものである。ただし、自然習得は、あくまでも管理者が存在しない、または特定できないという意味であって、目標言語を、まったく苦労せず、自然に習得できるマジックワードではないことに留意しなければならない。また、教師管理、学習者管理、それと管理者不在の管理という三つの管理タイプに優劣をつけるべきではない。習得環境や学習者の動機、学習スタイル、さらには学習ストラテジーなどの要因によって、管理タイプが決まってくるからである。また、個人レベルでも、習得過程の時間軸の中で、管理タイプが変化する。

三つの基本形以外にも、サブカテゴリーとして、いくつかの管理タイプが考えられる。例えば、フォーマリティという概念で区分できる管理もあるのではないだろうか。学習者の言語習得は、フォーマルに管理される場合と、インフォーマルに管理される場合がある。これは、場面やトピックによる区別ではなく、むしろ管理意識に由来する。教室場面では、コーディネーターがデザインしたコースの中で、インターアクションが行われるため、フォーマリティの程度が高いといえる。そうした場面では、フォーマルな管理役が必要であるが、管理役は、常に教師とは限らない。教師以外には、アシスタント教師、ゲストスピーカー、ビジターなども管理役になりうる。なお、学習者は、クラスビジターと、タスクとは関係のないおしゃべりなどをして、インフォーマルな

インターアクションをする場合もあるが、そのパフォーマンスが教室場面で起きる場合には、教師によってフォーマルに評価されることを認識しておくべきであろう。また、教室外でも、管理役が存在するが、その場合、教育機関、行政機関などの管理組織も含まれる。一方、インフォーマルな管理役としては、サークルの友人、大学で応対してくれる事務職員、アルバイト先の仲間や上司、入国管理局で対応する職員などが当てはまる。こうした管理は、フォーマルな管理と比べ、言語学習や、言語習得を意識しない管理といえるので、コントロールの程度も比較的弱い。

フォーマルとインフォーマルな管理が、管理意識の程度による分類とすれば、ミクロレベルとマクロレベルの管理は、ディスコースのタイプによる分類と捉えることができる。ミクロレベルの管理とは、接触場面のインターアクションで現れる談話ディスコースをどのように調整するかというレベルの管理である。例えば、教室場面では、母語話者である教師によるディスコースの調整行動として、簡略化コード、または媒介語の一種であるティーチャートークが代表的なミクロレベルの管理と捉えることができる。類似の調整ディスコースとしては、フォリナートークもあるし、学習者側には、中間言語といった調整行動もある。言い換えれば、教師が、学習者のアクセントを訂正したり、コミュニケーション・ストラテジーのトレーニングをするといった行動は、文法項目や社会言語項目に関する管理と見ることもできる。なお、学習者個人に対する管理も、ミクロレベルの管理に入れてもいいのではないだろうか。一方、マクロレベルの管理は、字義のごとく、もう少し広い範囲のディスコースの管理である。国の言語政策、教育機関の指導方針、また、クラスの運営方針などは、個人に対する管理ではなく、特定の集団に属するグループに対する組織的な管理と捉えた方がよい。

以上、3つの基本管理タイプ（教師管理・学習者管理・管理者不在）のほかに、フォーマル・インフォーマル、ミクロ・マクロといった言語管理を提示した。では外国人力士の日本語習得は、どのような形態に属するのであるだろうか。まずは、外国人力士というカテゴリーから説明してみたい。

3 外国人力士と日本相撲協会

外国人力士第一号は、1934年にロスアンジェルス生まれの日系二世である、平賀将司が出羽海一門の春日野部屋に入門したことにはじまるが、2000年11月場所の時点までに、相撲協会に登録された外国人力士は17カ国、延べ129名に上る。なお、平成13年11月場所で、十両以上の関取6人（横綱1人、平幕3人、十両2人）をはじめ、幕内から序の口までの総勢702名の内、外国人力士は、全体の6%弱を占めていた。また、母語別では、9つの言語にわたり、その中でも、モンゴル語の比率が、全体の65%以上を占めている（表1参照）。

表1 現役外国人力士の母語（平成13年度11月場所）

モンゴル語	ポルトガル語	韓国語	英語	トンガ語
27	3	3	2	2
中国語	スペイン語	ブリヤート語	グルジア語	
1	1	1	1	

新弟子検査に合格し、入門した外国人力士達は、相撲教習所で6ヶ月間学ぶことになる。相撲教習所は、新しく協会所属力士として登録された者を教育するため設立されたものである。そこでの教習は、実技指導と教養講座とがあり、実技指導は年寄と現役の幕下力士が指導員として当たり、相撲の基本動作や実技の習得を担当する。また、専門講師による、相撲史、国語（書道）、社会、生理学、自然科学、相撲甚句などといった、常識ある相撲人を育成するための教養講座を、毎日1科目ずつ受講しなければならない。

4 外国人力士と言語習得管理

ここでは、言語管理と自然習得について外国人力士を例に具体的に検証してみたい。

外国人力士には、接触場面でさまざまなマネージャーが存在する可能性がある。そうしたマネージャーとして、まず、相撲部屋では、親方、おかみさん、兄弟子、力士の鬘を結う床山、呼び出し、行司などが考えられるだろう。さらに、相撲界という少し大きな枠組みの中で考えた場合には、相撲協会、教習

所、同門部屋の関係者が、彼らの日本語習得を管理するかもしれない。また、地元の人々とのつきあいが加わると、ご近所管理、熱心なファンであるタニマチによる後援会管理なども考えられる。幕内に昇進した場合には、マスコミやファンとのインターアクションが増え、そうしたグループによる管理も新たに生まれる。外国人力士の言語習得管理を、1.で取り上げた管理タイプで分類してみよう。彼らは、教師による管理行動を受けたことがないため、自ら言語習得を管理するか、管理役がまったく存在しないカテゴリーに分類される。また、その管理が、フォーマルか否かという点、当然インフォーマルな色合いが強くと、言語習得の面で、相撲協会などの組織による管理が及ばないため、個人のレベルのディスコース、つまりマイクロレベルの管理が中心となる。まとめると、外国人力士の日本語習得管理は、学習者自身、つまり力士自身の管理もあるが、主に、自然習得タイプの管理もある。また、彼らの習得は、日本語教師のようなフォーマリティが強い管理よりは、インフォーマルな管理が中心となる環境で行われるといえる。さらに、相撲協会や相撲教習所による強い言語習得管理が確認できないため、相撲部屋でインターアクションをする日本人参加者のマイクロ管理が中心となる。

5 言語管理と日本語学習ストラテジー

これまで、言語習得と管理について論じてきたが、学習ストラテジーは、言語管理とどのような関係にあるのだろうか。学習ストラテジーは、管理プロセスの中で捉えるのが望ましい。それによって、これまでの学習ストラテジーに対する見方を修正することも可能になる。習得への働きかけは、学習ストラテジーという概念で捉えられているが、70年代以降、自らの言語習得に積極的に働きかける学習者は、教師によって成長すると同時に、自らも成長していくことが明らかになってきた。優れた学習者は、言語習得に対する意識が高く、また、学習ストラテジーを駆使し、自らの学習を自律的に管理している。近年、日本語教育の世界では、そうした学習者が自律的に使う、学習ストラテジーの役割が、注目されはじめている。学習ストラテジーは、新しい未知の世界の学問領域ではなく、学習者が普段意識的、無意識的に採用する、ことばの習得への働きかけであると捉えることができる。

学習ストラテジー研究および教育への問題意識が、これまでどのように出来あがってきたかを考える場合、学習ストラテジーの捉え方が見えてくる。これまでの学習ストラテジー研究では、オックスフォードの分類が、一つの基点になっていたので、オックスフォードの分類モデルを復習することから始めたい。彼女の分類は、習得に直接関わる直接ストラテジーと、学習環境を整える間接ストラテジーという、二つの大ストラテジーから成り立っている。直接ストラテジーは、1. 認知ストラテジー（学習の対象に働きかける）、2. 記憶ストラテジー（記憶に働きかける）3. 補償ストラテジー（またはコミュニケーション・ストラテジーといい、ディスコース環境を調整する）から構成され、間接ストラテジーは、1. メタ認知ストラテジー（学習の計画や実行、評価に働きかける）、2. 情意ストラテジー（感情的な障害を調整する）、3. 社会的ストラテジー（ネットワークを構築し、社会的環境に働き掛ける）の3要素をもつ。とくに、間接ストラテジーは、直接ストラテジーと異なり、習得の基本的な構造を整える働きを備えているところに注目したい。

ただし、オックスフォードの分類は、一部の習得目標能力への関心が強すぎ、文法能力に比べ、社会言語能力や社会文化能力が十分に射程に入っていないという問題がある。この社会言語能力と社会文化能力は、学習者ストラテジーにとって、大きな意味をもっているといえる。

学習ストラテジーを問題の調整という観点から考察した場合、直接習得に関わる調整ストラテジーと、表層上の問題だけを解決するストラテジーに分けられるが、オックスフォードの補償ストラテジーならびに、これまでのコミュニケーション・ストラテジー研究では、この二つを明確に分類する作業はされてこなかった。ディスコースの表面上に一時的な緊急避難と、直接習得に結びつくストラテジーの見極めは重要である。また、オックスフォードの理論は、教室活動が中心の学習者をターゲットにしているという批判もある。なぜならば、教室外の接触場面で応用すべき具体的なストラテジーへの提言がなく、それが間接ストラテジーへの関心の薄さに繋がっている。社会的ストラテジー、そして情意ストラテジーとメタ認知ストラテジーは、習得のための基礎構造の

役割を果たしているが、これらのストラテジーを適用すると、インプットが容易に得られる可能性もある。

6 外国人力士と日本語学習ストラテジー

ここでは、外国人力士が、具体的にどのような学習ストラテジーや学習リソースを応用しているのかを検証する。その中でも、本稿では、社会的ストラテジーとリソースの関係に焦点を当てたい。学習リソースは習得を管理する上で、有効なツールになる。また、リソースには、学習活動を特徴づけたり、活動自体を活発化させる働きがある。インターアクションモデルを提供する役割もある。リソースにも、言語管理と同じように、いくつかのタイプに分けられる。ここでは、構造化と非構造化という区分で考えてみよう。

構造化リソースは、何かを説明し、理解させたり練習させたりする目的が含まれているので、解釈や練習アクティビティ用として使われるリソースである。一般的に、構造化リソースは、学習者にとってわかりやすく構成されているのはもちろんであるが、教師にとっても教えやすい構造になっている。日本語の教科書には、「この本の使い方」といったコーナーや、教師用マニュアルなどが別冊として用意されている場合は珍しくない。一方、非構造化リソースの場合、それ自身、教育目的で使用されることを期待しているわけではないので、当然ながら、学習上の便宜は図られていない。いわゆる生教材 (authentic resource) と呼ばれるものがこのカテゴリーに入り、どちらかといえば、実際使用場面での使用に適している。もちろん、生教材は、教室場面での学習環境を豊かにする役割を果たす (McGarry 1995) という主張があるが、これは、リソースの限定使用につながる恐れがある。非構造化リソースは、もう少し広い範囲の接触場面で捉える必要がある。たとえば、生教材は、インターアクション行動そのものにも応用するべきである。では、教師が管理しない教室外の場面で、学習者にどのように自律的に使わせればよいのであろうか。外国人力士が使用するリソースを検証しながら、自律学習と日本語習得について考えてみたい。

外国人力士が使用するリソースは、ネットワークや社会的ストラテジーと強く関わりと特徴づけることができる。社会的ストラテジーは、効果的な習得を促進させるキー・ストラテジーとしての役割を果たし、社会的環境に働き掛けながらネットワークを構築するため、ほとんどの場合、ネットワークに働き掛けるといえる（ネウストプニー 1999）。外国人力士が使うリソースの場合、メディアネットワークと会話行動ネットワークに分類できる。メディアネットワークとは、電話（携帯電話も含む）、テレビ、ラジオ、映画、ビデオ、インターネット、e-mail、手紙、カラオケなどのリソースが含まれる。一方、会話行動ネットワークとは、接触場面でのインターアクション行動を通して、日本語を習得していくために、ネイティブスピーカーとのネットワークを構築する行動を指す。

陸奥部屋の星誕期は、日本語の習得に関するインタビューで次のように答えている。

（2000年10月15日 陸奥部屋にて）

星誕期：（日本語を教えてもらったのは、）① 最初のころはやっぱりおかみさん、親方が多かったです。② そのあと、そのとき関取におった人間から時間の読み方とか教えてもらったんですけど。③ あとは自分でテレビ見たりして覚えたんですよ。あと、しゃべれるようになってからは、④ よその関取衆、寺尾関とか、結構井筒部屋に稽古行ったりとか教えてもらったり、⑤ 巡業行ったときに話したりとかありました。（下線は筆者）

下線①、②では、部屋の関係者による言語習得管理があったと捉えることができる。確かに、部屋の関係者は、さまざまな工夫を施して、外国人力士に日本語習得を管理している。たとえば、玉ノ井部屋の親方夫人は、入門したブラジル出身の国東に絵本を買ってきて、日本語を覚えさせたと報告しているし、元陸奥部屋師匠の夫人は、星誕期、星安出寿という二人のアルゼンチン力士を、はじめて角界に弟子入りさせた親方の下で、献身的に面倒を見たおかみさんであるが、彼女は、テープレコーダーを買ってきて、日本語を吹き込むなど

という工夫を見せた。また、高砂部屋の床山は、入門したての小錦（現 KONISHIKI）に、カラオケで、細川たかしの「北酒場」を歌わせながら、ことばの意味を教えたという。しかしながら、そうした時期が長く続いたわけではなく、③で明らかのように、力士自身の管理（学習者管理）へと移行していく。さらに、④、⑤で見られるように、接触場面で日本人とコミュニケーションできるようになると、部屋の関係者以外とのネットワークを広げながら、日本語の習得機会を増やしていく。

また、星誕期は、同じインタビューで次のようにも答えている。

星誕期：ちゃんこ番やってるときに、買い物連れてってもらって、野菜これなに、って聞いてたんですけど、⑥ 自分の頭の中で、覚えるしかなかったんですよね。（中略）先々代の親方が買い物が好きで、⑦ 一週間に一回築地市場に行ってたんで。それで話したりとか、よその人の会話を聞いたりとか。

（下線は筆者）

⑥では、習得には、さまざまな機会があるが、結局自分自身で自律学習をしていかなければならないことを自覚した様子が伺われる。そうした強い動機付けによって、⑦で見られるように、接触場面をできるかぎり有効活用しようと工夫していた。さらに、外国人力士が、具体的に応用した学習リソースについて、見てみよう。

番付表

番付表は、非構造化リソースの特徴を有すると判断できるのではないだろうか。学習目的で使用されることはなく、また、使いやすいように工夫もされていない。しかし、外国人力士にとって、明らかにインターアクション場面で実際に使用するリソースである。彼らは漢字を習得するために、特別なリソース（たとえば漢字練習張）を使っているわけではないが、同門、同部屋は言うに及ばず、対戦相手の四股名はほとんど理解している。では、こうした力士たちは、番付表をどのように位置づけているのであろうか。外国人力士とのインタビューから見てみよう。

(2000年5月30日 早稲田大学で行われた、「言語学習ストラテジー概論」の講義での、ゲストスピーカーセッションにて)

インタビュアー：「それから、聞くとか話すだけではなくて、読むとか書く、
ですね。先程お伺いしたときは、自信がない、僕は読めませんっておっしゃるんですが、番付はいかがなんですか。」

旭天鵬：「見た目で。感じでわかります。」

インタビュアー：「感じで？」

旭天鵬：「書けって言われたらあれですけど、見た目で、誰が誰かは。」

インタビュアー：「どれぐらい分かります？ もう番付に載っている力士は全部？」

旭天鵬：「ええ、幕内、十両は全部読めますね。」

モンゴル出身の旭天鵬が所属する大島部屋の全力士や、大島部屋が所属する立浪・伊勢ヶ濱連合の部屋衆の四股名だけではなく、幕内、十両合わせて70名近くの関取の名前がインプットされているという。どの程度の漢字を理解していたかを調べたところ、インタビューの年の11月に行われた九州場所用に作成された番付表の中で、幕内及び十両の四股名に使われている漢字数は169字に上った。そのうち、常用漢字に入っている字数は、8割以上である。ちなみに、その漢字自体、どの程度の日本語力の外国人がマスターするレベルかを、日本語能力検定試験の出題基準から見てみると、幕内と十両の場合、1級49字、2級44字、3級17字、4級27字となっていた。

テレビ・ビデオ・映画

番付表同様、外国人力士が、日本語のリソースとして触れる機会が多いメディアネットワークは、テレビ、ビデオ、映画であろう。日本の教育機関に在籍する日本語学習者より、こうしたリソースに触れる時間は長いかもしれない。大部屋で、他の兄弟弟子と生活する中で、自然にテレビを見るようになり、好きな番組も増えていく。

カラオケ

力士にとってカラオケは、後援会とのつきあい、千秋楽のパーティなどの余興には欠かせないものになっている。学習ストラテジーの観点から分析すると、ネットワークの維持、参加度を増すための有効なツールとして捉えることができる。先に登場した、旭天鵬のインタビュー内容からも伺える。

旭天鵬 : 「付き合いで行くと、結構歌えって言われるんで、歌えないと、また誘ってもらえなくなっちゃうから。」

カラオケも、大切な仕事というわけだ。ごひいきに可愛がってもらうのも、力士が名前を覚えてもらう努力は並大抵のことではない。このように、日本人の参加者を引きつけたり、ネットワークへの適応能力を高めるストラテジー（ネウストプニー 1999）として、大きな役割を果たしていると考えられる。なお、同じく旭天鵬は、カラオケの歌詞の覚え方について、ユニークな記憶ストラテジーを次のように披露している。

インタビュアー : 「演歌は、最初どうやって覚えるんですか？はじめは、あまり、わからないじゃないんですか。」

旭天鵬 : 「テープかCD借りてきて、聞きながらモンゴル語で書くんです。書いたやつをテープに流しながら一緒に歌って全部覚えちゃうんです。そうするとカラオケ見ないでも歌えるんですけど、(みんなの前では)一応見ないと、やっぱり(かっこうがつかないから)。(会場笑う)」

インタビュアー : 「結構、時間かかるでしょう、覚えるまで。」

旭天鵬 : 「そうですね。僕、結構音楽が好きなんで、何回も聞いてたら覚えちゃうんですけど。」

インタビュアー : 「最初は、じゃあ歌える曲は少なかったんですね。」

旭天鵬 : 「そうですね。最初はやっぱ演歌、吉幾三とか歌ってました。」

ファンレター・電話・Eメール

ファンレターも、ファンからのメッセージとして大きな役割を果たす。日本語教育の観点から分析すると、ファンレターは、かなり有効な読解教材ではないかと予想される。理由として、本人への励ましの籠った内容が書かれているため、他の読解教材と比べ、親近感が湧き、読んでみたいという強い動機が生まれる。おまけにファンレターはさまざまなバリエーションを持った字体（手書き、ワープロ文字など）で書かれており、そうした字体の習得にも繋がるのである。それ以外には、電話やEメールもリソースになる可能性がある。モンゴル出身の朝青龍（現高砂部屋）は、インタビューでファンからのEメールを読むのが好きだと報告している。

7 まとめ

以上、外国人力士の日本語習得を言語管理と自然習得の観点から考察し、自然習得を行っている彼らのインターアクション行動から、学習戦略と学習リソースに焦点を当てた。その結果、日本語を習得する上での管理者は存在しないが、常に目標言語に漬け浸された、理想的な習得環境が提供されていることが明らかになった。外国人力士の日本語習得プロセスは、一般の外国人日本語学習者にどのように応用できるのだろうか。教室場面を、ティーチング・アシスタント、ビジターセッション、ゲスト講師、ボランティアといったネイティブスピーカーを参加させると、管理の形態も変化すると思われる。教師以外の参加者とのインターアクションによって、さまざまな管理のバリエーション（学習者、管理不在、フォーマル、インフォーマル、マイクロレベル、マクロレベル）が現れ、学習者が自律学習するための刺激になりうる。そうした、学習者トレーニングへの関心が、今後不可欠になってくると思われる。ただし、その場合、次のような認識が必要となる。

学習戦略・トレーニングでは、戦略そのものを教えるという態度が強調されているが、これは未知の能力を習得するという印象を与えてしまう。成人学習者の学習戦略のいくつかは、すでにそれまでに、形成されているものであり、新たにインプットするという性質のものではない。むしろ、効果的な戦略を習得するように、これまでの戦略を

教えなおすという態度を持ったほうがよい。

外国人力士の日本語習得研究から、これまで、そしてこれからの日本語教育や第二言語習得を考える機会を、今以上に増やすべきである。

参考文献

Jernudd, B. H. and J. V. Neustupny. 1986 Language planning: For whom?, *Proceedings of the International Colloquium on Language Planning*. Ottawa: Les Presses de l'Université Laval. pp.71-84.

宮崎里司 2001a 『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』、日本語学研究所

宮崎里司 2001b 「外国人力士の日本語習得と学習ストラテジー：社会的ストラテジーを中心として」、『講座 日本語教育』、第37分冊、71-83頁、早稲田大学日本語研究教育センター

ネウストプニー、J. V. 1999 「言語学習と学習ストラテジー」、『日本語教育と日本語学習』（宮崎里司、ネウストプニー共著編）、くろしお出版

『大相撲』読売新聞社

Oxford, R. 1990 *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. New York: Newbury House. (日本語訳は、Oxford, R. 著、宍戸通庸・伴紀子 (訳) 1994 『言語学習ストラテジー』東京：凡人社)